

低出生体重児におけるスクリーニング時期の検討

名古屋市立大学医学部小児科 伊藤 仁
森下 秀子
和田 義郎

我々は、血中アミノ酸測定時に、呼吸障害を示さず、重症感染症のない比較的順調な経過をとった低出生体重児について、出生体重が1,500グラム未満の群と、1,500グラム以上、2,500グラム以下の群の計2群について、ミルク摂取後の血中アミノ酸の経時的変化について検討した。ミルク摂取量の目安は、 $60\text{ml}/\text{kg}/\text{day}$ を最低維持量と考え、平均値及び、標準偏差の算定には、 $60\text{ml}/\text{kg}/\text{day}$ 以上のミルク摂取児のアミノ酸値を用いた。今回検討したのは、Met, Leu, Tyr, Phe, Hisの5種類のアミノ酸である。

ところで、現在、低出生体重児をとり扱う施設では、スクリーニングの採血時期について一定の基準がない為に各施設によって採血時期は異なっている。そこで、その採血時期についても検討した。

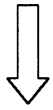
結 果

- ① 1,500グラム未満及び、1,500グラム以上、2,500グラム以下の低出生体重児の2群において、ミルク負荷による影響は、ほとんど差がないと思われる。さらに、ミルク量の多寡が5種のアミノ酸値に重大な影響を及ぼしていない。
- ② Tyr においては、低出生体重児、特に出生体重の少ない極小未熟児は、2回のスクリーニングが必要と考える。(5～7日に1回、2カ月頃に1回)
- ③ 上記アミノ酸のうち、Tyr は血液 pH と、5%以下の危険率をもって逆相関の関係にあり、一般状態の悪化がある場合にはスクリーニングの結果にて疑陽性を示す可能性もある。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



結果

1,500グラム未満及び,1,500グラム以上,2,500グラム以下の低出生体重児の2群において,ミルク負荷による影響は,ほとんど差がないと思われる。さらに,ミルク量の多寡が5種のアミノ酸値に重大な影響を及ぼしていない。

Tyr においては,低出生体重児,特に出生体重の少ない極小未熟児は,2回のスクリーニングが必要と考える。(5~7日に1回,2ヵ月頃に1回)

上記アミノ酸のうち,Tyr は血液 pH と,5%以下の危険率をもって逆相関の関係にあり,一般状態の悪化がある場合にはスクリーニングの結果にて疑陽性を示す可能性もある。